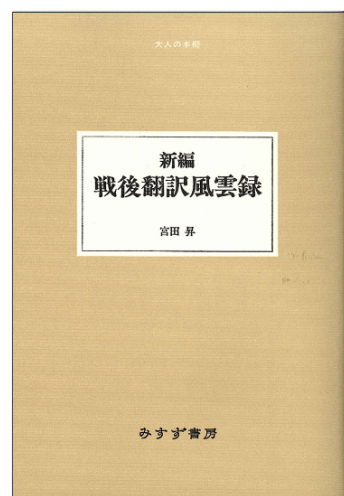


## 昭和は遠くなりにつれ —宮田昇『新編 戦後翻訳風雲録』—

『近世畸人伝』には僧尼の如き出家、儒家、隠士で人が分類されている。いわば世捨人。明治を描いた随筆にも変人・奇人・通人・風流人といった面白い人々がしきりに登場。近代産業社会や現代管理社会には見られないはみ出しものが大勢いた。本書は戦後海外本翻訳に携わった人々の異能ぶりを活写、二十年前出版界で話題をとった。(菊地実)

### 人物評価の難しさ

この本に出てくる人物の三、四割は身近に見聞き、上司先輩お供で酒席を共にした。出版学会でお目にかかった方々もいらっしゃる。こういう本は実は紹介しにくい。なぜなら二十代の頃で記憶が曖昧で、本書記述と真反対意見も聞いている。以前ある業界史編集の手伝いをした時、長老たちの意見が異なる。年代、製品、技術は原資料に当たれるが、導入プロセス・技術評価・制作秘話、中でも業界発展のキーとなった人物評価は甲論乙論で意見が噛み合わない。まさに芥川龍之介『藪の中』状態。メディア業界／映像制作業界以上に出版人はよく言えば个性的、悪く言うとお山の大将の人間が多い。今回紹介されているのはミステリ・SFの早川書房、学術書からミステリー文庫に移行した創元社を中心に、その周りを行き来した翻訳者たちの驚くべき「个性的」行



＜みすず書房＞

状記である＜図表1＞。

### 詩人に真実なし

古来から詩人は天才肌。近代でもバイロン、ランボーのように様々な尾鰭伝説神話を作ってきた。本書でも取り上げられている斎藤正直(仏文学者・明治大学学長／本書の標題「酔師」)は「詩人と無頼とは、紙一重である」(9頁)。さらに本書著者は「詩人と俗人は紙一重・・・人生に対する処し方は、一見無頼を装いながら、けっこう俗な人間が少なくない」(9頁)と喝破。「映画人テレビマンもそうだなあ」と私もため息をつきながらページを捲った。

ここで登場するのは戦後一世風靡した『荒地』派詩人たち。北村太郎と中桐雅夫は「淡白で心の優しい人、前者は怜悯で後者は天真爛漫・・・人を傷つけまいとする心配りを持っていた」(16頁)。『荒地』代表的

### ＜図表1＞本書8つの分類と目次

■詩人	3.剛直 福島正実(3)
1.天真爛漫 中桐雅夫	4.生まれ育ち 厚木淳
2.心の深淵 鮎川信夫	■エージェント
3.細心 田村隆一(1)	サバイバル・ギルト 三田村裕
4.無頼 田村隆一(2)	■ジャーナリスト
■奇人	1.ムッシュ 新庄哲夫
1.底抜けバケツ 高橋豊	2.転職 松田銃
2.好奇心 宇野利泰	■大学教員
3.奇矯 田中融二(1)	酔師 斎藤正直
4.自死 田中融二(2)	■出版者
■児童文学者	1.誤解 早川清(1)
凝る 亀山龍樹	2.所有のこだわり 早川清(2)
■編集者	3.江戸川乱歩 早川清(3)
1.赤鉛筆 福島正実(1)	4.横浜事件潜伏者 桑名一央(1)
2.醒めた浪漫 福島正実(2)	5.匿名の翻訳者 桑名一央(2)

詩人・鮎川信夫の標題は「心の深淵」。「死んだ時絶句した・・・婦人と名乗った女性、真の住家は成城ではなく大岡山」と謎めいた生活をしていた。主役は早川編集長で著者上役だった田村隆一。この御仁、大塚二業地・三商・海軍中尉殿は晩年鎌倉文化人に昇格してマスコミ寵児となったが＜実務は？＞の人。「田村が依頼した原稿の催促、印税等の食い違いの言い訳、支払いの遅延の断りはモッパラ私の仕事となった」(33頁)。「生活は家来どもに任せておけ」とリラダンのように振る舞っていたのか？「彼が飲んだ時見せる豪快さ、洒脱さとは違い、よくいえば細心、繊細、悪くとれば臆病。小心」(27頁)で、いい加減な仕事と私生活には驚かされる。

### 奇人たち

ブラッドベリ『華氏451』ル・カレ『寒い国からきたスパイ』名訳で知られる宇野利康(1909-1997年)を「奇人・・・野菜をいっさい食さない、朝七時に寝て昼の三時に起きる・・・両切りのピースのチェーンスモーカーだったのに長生き・・・病癖と思われる嗜好好き」(60-61頁)。ものすごい情報通で、小林信彦処女作『虚栄の市』モデルとも言われている。「彼がすごいのは死ぬまで現役であった」と敬している(60頁)。

本書で一番印象的深いのは、「奇譚」と標題された田中融二(1926-1998年)、『ピーターの法則』はじめベストセラーも多い。「ほとんどの印税を女性、酒、一人登山を兼ねた旅行に費やした」(66頁)。自動車と運転にこだわり胃がんと知った平成十年に小樽郊外の山で用意周到に自死した。

本書で「転職」と表題のつく松田銃(1913-2002年)には、『西洋長屋交友録』(新潮社／1982年)という好著がある。東大経済学部出身で、横浜正金銀行・GHQ経済科学部・日銀。57年から世界銀行ワシントン勤務と人も羨む？華麗なエコノミスト。その後、オーストラリアラジオ局を経て帰国後は米JWTンプソン日本支社に就職。翌年『リーダーズダイジェスト』日本語版編集長になった。戦後『リーダイ』は飛ぶように売れたが、松田が入った頃

は数十万部と一桁減っていた。翻訳が「読みやすくメリハリのあるものになった」(174頁)。「いくら親しくなろうと、言うべきことはズバリ言う癖が、敵を作った」(177頁)。

### 編集者と出版経営者

本書主役は、田村隆一に次いで上司になり早川SFを作った福島正実(1929-76年／本書「赤鉛筆」「冷めた浪漫」他)。常盤新平は名前を挙げていないが「編集者が徹底的に手を入れた・・・彼のおかげで一人前の翻訳者になれた」(97頁／原典：日経新聞)としている。この「よい翻訳を読者に届けるという意欲が必要である・・・福島正実はその典型」(97-8頁)。私の先輩たちもそうで、高名な学者・作家を相手に本当に喧々諤々だった。作家・漫画家・翻訳者は良き編集者が必要。さて福島正実は「ミスターSF」とさえ言われたほど、当時異端視されたSFの市民権を確立させるべく、身を刻む努力をした・・・その後のSFは一時、彼の願いとは違う形で発展したものの、現在はボーダレスのエンタテインメントの波に呑み込まれている」(108頁)。なを本稿では、有名な『SFマガジン』昭和四十四年号二月号覆面座談会事件については割愛する。

「かつて翻訳出版は、マイナーで大手出版社は手を出さない分野だった。昭和二十年代には、ミステリー、SFを出版する者は、かならず倒産するという神話があった」(189頁)。そうした中で、学術出版から転向した東京創元社・厚木淳、早川書房創業者・早川清を活写。「早川は鋭い経営感覚がある一方、早川家の財産を保全するためならなりふりかまわない執念があった」(195頁)。また親族以外の実力者を排除。組合潰しも中小企業経営者らしい。その例として、ハヤカワポケットミステリーの装幀画／勝呂忠原画の所有権をめぐる筆者との交渉事も記している。

そのほか日系二世の悲哀、横浜事件関係と面白いエピソードが多い。＜酒・煙草・喧嘩＞と昭和戦後の匂いがプンプンする本で、その残滓を知っている者にとって懐かしい。渋谷「とんぺい」「鶴八」、神田「三州屋」などで見かけた出版人や文学者を思い起こす。なを戦後海外翻訳権に関しては、著者の『翻訳権の戦後史』(みすず書房)が参考になる。

■著者/ 宮田昇(ミヤタ ノボル)。1928-2019年、東京生まれ。雑誌「近代文学」、早川書房編集部、チャールズ・E・タトル商会著作権部を経て、1967年、日本ユニ・エージェンシー創設、元代表取締役。1991年、日本ユニ著作権センター創設、元代表理事。

■書誌/ 『本の雑誌』1998年7月号-1999年8月号に連載したものに加筆。原題『翻訳者が神々と会った時代』。四六判、254頁、みすず書房2007年6月発行。